北八（きたやつ）

清水　一美

蒼古する沈黙が堆積し
化石するねむり
意味以前の
湧きあがる岩漿
元始は言葉を求め
既視を追う雲の意匠
風に競る高嶺の指向は
迫りあがる蒼穹のいろを
留めかね　隔絶を
潮騒ぐ雲海に埋める
変調は雲の砕ける催い
その波頭の響もしに
鉾立てる岩は震え
衝立てる石英を仰ぎ
来光を臨む高山（たかやま）の
花を抱く

色（しき）に狂える風は
始原より震える波動
星の座標を秘して語らぬ
目語に神がかる漆黒
ねむれる黒木の
樹海に水づくをあらがう

一本(ひともと)の樹　その広げた掌(たなごころ)
夜のうずたかい静寂に耳を聾し
玉響の紅玉に兆す　宿世の
光儀(すがた)　その逢い初めの朱
捻れた円環をひたぶるに廻り
黄泉の汀(みぎわ)を洗う夜目に甦る
未明に屠られる双眸に
流れると見えた一縷の光芒は
そばだつ受胎に贄の譜を祝(ほ)ぎ
羊水に満ち干の海(み)
二価鉄に託された承継に
産褥の歓喜を叫ぶ
八に裂かれた岩稜の上
焼けただれた天海に滲む　蒼
その藍を標す孤高は
水面(みなも)に散光する翡翠の
たゆたう千の影を分ける
山稜鏡　いろを目覚めねむりは
贄の賑わう樹木(もり)に抱かれ
水晶の頭蓋(とうがい)に星海原を拓く
計れぬ里程に佇む極北を問う頂
その羅針に射貫かれ狂信する
創世の胎動を刻みつづけ
在ることに盲いた
在りつづける眼差し
一瞬きに過ぎさる光年を
結氷した沈黙に凝らし視る
かつて溺れた蒼の馥郁
生みなす豊饒を掠め
光に燃える水面ゆ

燔祭の煙に燻される宙(そら)へ
贄の眼のいろを流砂と流し
過越の血に沸く山の端ぎわに
弓を引分け　離れ絶望の悲鳴は
碧落を射落とし　褪めた夢の
暁　闇を死慕する
剝がれ落ちる雲母(きらら)
その一閃きの問いに
切り裂かれる未生
以前の　更の蒼
魂送り
回向し極北の
見開かれた光眸
その光点を堆積し
樹木(きぎ)の宇宙(そら)に
沈む記憶を
灯す光苔
虚に響く　ならぬ
詞(ことば)の抑揚は
真白き紙の飢
意味を削ぎ
隠匿される
隠語
星のすだく　宵
闇の抱く　天の川
空泣(そらがなく)　不帰に
盲いた眼差しが
水玉(すいぎょく)の眼窩より迸る
失われし視をし
樹木(もり)に弔う

苔のまほろば
透過する虚仮を埋め
対流の累々と屍は重(しげ)く
充溢を光の陰に問う
視に添い死をし偲ばし
自然(じねん)にそよぐ風の声
無声子音に共鳴し
光年を灯す孤独
振り返る眸も
風のいろ
樹木(もり)にねむり
樹木に目覚める